

もったいない学会共催 第29回 サッポロ・インターナショナル・ナイト
もったいない学会 北海道支部設立

「もったいない」をキーワードに食料や水問題を考える「第29回 サッポロ・インターナショナル・ナイト（北海道青少年科学文化財団主催）」が2月10日、札幌市京王プラザホテルで開催され、北大の大学生や約20ヶ国の留学生ら約300人が参加し、資源の大切さを学んだ。

基調講演をした北海道大学低温科学研究所の福田正巳教授（もったいない学会理事、北海道支部長）は「日本には、250万台の自動販売機があり、電力消費量は、年間75億キロワットで原子力発電 1基分に当たる」と指摘、「もったいない精神で生活の利便性を少し見直すことが大切」と呼びかけた。

毎日新聞カイロ支局の高橋宗男特派員がビデオレターでエジプトの環境問題を報告。環境汚染で深刻な影響が出ているスフィンクスやナイル川の現状を報告した。（以上 毎日新聞2月11日道内版）

北大などの大学生と高校生と留学生はその後、以下の5つのテーマに分かれて、それぞれの部屋で約2時間にわたりグループフォーラムを行った。

1. エネルギー消費から見た世界の食卓（リーダー 劉さん、町田さん）
2. 深刻な世界の水（飲料水、農業用水、生活用水）（リーダー 中川さん）
3. リサイクルと環境問題（リーダー 板倉さん）
4. 石油ピークなどエネルギー（リーダー 関谷さん）
5. 歴史やアイヌ、アミッシュに学ぶ生活スタイル（リーダー 張さん）

1の食料では、グループの中で企業側と消費者側に分かれて、コンビニなどで賞味期限切れにより大量にものを捨てることの是非を話し合った。

2の水問題では、ネパールでは、水はあるが、汚いので飲料用の水がすくないと紹介した。バーチャルウォーターにも、話が波及し、学生の関心は高かった。

3のリサイクルと環境問題では、買い物袋にポリ袋を使う是非など、身近な問題を取り上げた。

4の石油ピークのグループに石井吉徳会長が参加し、海外の留学生に「もったいない」を英語で説明するのに、汗だくになっていた。これは日本の古来の概念であり、文化、信仰であり、それを海外の人に説明することの困難さをあらためて、感じた。リーダーの関谷さんは、「もったいない」は個人では自分の財布の問題で意識は高い、しかし、会社、組織、地域、国レベルの「もったいない」はどこで議論されているのかと指摘した。

（これは、もちろん、もったいない学会のミッションである。）

5の生活スタイルについては、対話が白熱していた。（写真参照）

石井吉徳学会会長が「もったいない」についてスピーチを行った。石油ピークで北海道が影響をうけるのは、「交通」と「エネルギー」である。もっとエネルギー効率の良い公共交通機関の整備を検討すべきであると提言した。

交流パーティーでは、留学生や学生、女性を支援する、ユネスコ、日米協会、日豪協会、国際ロータリー、英会話協会などから約300人が新たに加わり、盛大なパーティーになった。壇上では、各国の留学生によるマカレナダンスで盛り上がった。(写真参照)

写真1 サッポロ雪祭り

写真2 サッポロ・インターナショナル・ナイト 会場の様子

写真3 どのグループに加わるか

写真4 世界の食卓のポスターの前で

写真5 生活スタイルのグループフォーラムの様子

写真6 石井会長のスピーチ

写真7 壇上でもったいない学会紹介(石井会長、天野、加藤)

写真8 福田先生を囲んで

写真9 マカレナダンスで盛り上がる留学生、学生

福田先生のご意見(福田先生と少し懇談)

1. 便利だから無駄をする。しかもそれに気がつかない。例えば電気ポットはお湯を沸かすときには132.8kwh、保温に983.2kwhもかかる。7倍以上である。その都度沸かしたほうが、合理的である。
2. 持続可能な発展は不可、人口は増加、資源は有限の中で、地球と長期的に共生していく思想を持つことが大事
3. 既存の会社を守ることも大事だが、国全体の長期的な利益や生き残りを考えることを優先すべき、既存の会社には、セーフティネットなり、それなりの対策も平行して考える。
4. 次世代以降に少しでも資源を残すことを考えるべき
5. レバノン杉など自然からの収奪で、放っておいては元に戻らない物もある。その前に自然との共生を考える。収奪してしまった物は、人間の手で保護して100年、200年の長期戦で、少しずつ戻していく。
6. 自然との共生は、歴史から学ぶべきである。また、自然との共生は自然の恵みに、感謝する心を持つことがスタートである。イヌイットや我々の先祖は皆そうしてきた。

以上 文責 天野